

# 『 On-line みんなで法華経を学ぼう! 』 vol.24 Mar.2024

— Let's embark on a journey to discover our own "perspective on the Lotus Sutra".

(みんなで“法華経観”を見つける旅に出よう)

## 『妙法蓮華経 随喜功德品第十八』 (本門・流通分)

## 『妙法蓮華経 法師功德品第十九』 (本門・流通分)

○ 『又如来の滅度の後に、若し人あって妙法華経の乃至一偈・一句を聞いて一念も随喜せん』

者には、我亦阿耨多羅三藐三菩提の記を與え授く』 (法師品 二〇二頁 終五行)

○ 『其の習學せざる者は 此れを曉了すること能わじ』 (方便品 八十二頁 四行)

○ 「習学」の3つのステップ「聞解・思惟・修習」

『若し聞解し思惟し修習することを得ば、必ず阿耨多羅三藐三菩提に近づくことを得たりと知れ』 法師品 二〇九頁三行

○ 『十分の一でも実践できれば、いや、その一つにでも徹することができれば、りっぱな精進といえる』 (『新釈法華三部経 第一巻』 P8・8行/P5・1行)

※表記 例：(P353・1行/P259・7行) ⇔ (『新釈・文庫版』頁数/『新釈・単行本』頁数)

### <分別功德品の復習>

・信仰にはかならず功德がある— この世で善業を積まず、価値の低い人生を送る人は、いつかは必ず不幸がやってくるに違いありません。～ 「自分は絶対の存在である仏さまに守られているのだ」という大安心の上に立つ。こういう心境に達すると、信仰によって心境が変わります。そして心境が変わることによって人生が変わる。

・功德はあくまでも結果— 現世利益を『結果』として受け取るのではなく、初めからそれを『目的』として信仰する人。～ 現世利益だけを目的として信仰する人は、すぐに退転しやすい人です。現在の苦しみ・悩みはいちおう差し置いて、久遠実成の本仏である仏さまに何もかもお任せしてしまうという無我の心境にはいることができた時にこそ、心は自由自在を得、苦しみ・悩みは向こうの方で消えていってくれるのです。

・仏の無量寿を確信して得られる12の功德 (P245・6行/P177・終2行)

- ① 「無生法忍・むしょうぼうにん」 人生の「変化」(社会や環境の変化にも)にとらわれない。
- ② 「聞持陀羅尼・もんじだらにもん」 教えを受持して、悪を止め、善を進める力を得る。
- ③ 「樂説無礙弁才・ぎょうせつむげんさい」 自ら喜んで法を説き、如何なる妨害にも負けず、どんな相手をも説得できる力。
- ④ 「旋陀羅尼・せんだらに」 あらゆる悪を止め、あらゆる善を進める力を無限に広げて行く。

⑤「不退の法輪を転ず・ふたいのほうりんをてんず」どんな困難があっても、一步も退くことなく教えを説き広めていく。

⑥「清浄の法輪を転ず・しょうじょうのほうりんをてんず」何一つ『報いを求める心』もなく、純真に法を説き、菩薩行を行う。

⑦～⑪「<sup>まさ</sup>に<sup>あ</sup>の<sup>く</sup>た<sup>ら</sup>さん<sup>み</sup>やく<sup>さん</sup>ぼ<sup>だい</sup> <sup>う</sup>三<sup>び</sup>菩提<sup>を</sup>得<sup>べ</sup>し(八生・四生・三生・二生・一生)」

(八度生まれ変わり、四度～二度生まれ変わり、いや、たった一生の間で) 仏の悟りを得る。

⑫「<sup>は</sup>つ<sup>せ</sup>か<sup>い</sup>み<sup>じ</sup>ん<sup>じ</sup>ゆ <sup>し</sup>じゆ <sup>み</sup>な<sup>あ</sup>の<sup>く</sup>た<sup>ら</sup>さん<sup>み</sup>やく<sup>さん</sup>ぼ<sup>だい</sup> <sup>こ</sup>ころ <sup>お</sup>こ

数限りない衆生が、みな仏の悟りを得ようという志を起す。

・**生きがいを知る大功德**— われわれは、この世限りで終わりになるものではありません。次の世、また次の世と生まれ変わっていくのです。～ 眞の信仰を持ち得た者は、常に一步ずつでも「仏の境地」へ近づいて行くよう、充実した生き方をしようとします。～ 次の世もまた次の世も、自分はいつまでも六道を輪廻し続けなければならないと気づけば、我欲にとらわれた人生を送ることが恐ろしくなります。そして少しでも「善い心を持ち・善い行い」をすることの大切さに気が付きます。

「佛壽の無量なることを聞いて 一切皆歡喜す ～ 一切善根を具して 以て無上の心を助く」(二八六頁 終行)

・**四信五品** 仏の在世と滅後の弟子たちが心がける修行精進。

【**在世の四信**・さいせのしん】 — 仏の在世の徳行 —

一念信解いちねんしんげ/ 略解言趣りゃくげごんしゆ/ 広為他説こういたせつ/ 深信観成じんしんかんじょう

【**滅後の五品**・めつごのごほん】 — 仏の滅後の徳行 —

初随喜しよすいき/ 読誦どくじゆ/ 説法せつぽう/ 正行六度しやうぎやうろくど/ 兼行六度けんぎやうろくど

・**回 向** — 本来、自分が受けるべき功德を、他へ振り向けることです。～ 「回向」は決して亡き人に対してばかりするものではありません。その本義から言えば、「生きている人に対して行う」ことが、もっと意義あることと言えます。ですから、読経する時、全人類の至福を念じて「願わくはこの功德を以て 普く一切に及ぼし 我等と衆生と 皆共に仏道を成ぜん」と唱えるのです。

『佛子此の地に住すれば 則ち是れ佛受用したもう 常に其の中に在して 經行し若しは坐臥したまわん)』 (二九五頁 終二行)

その仏子の住している所は、仏さまがご自分の住む場所としてくださるというのです。～ そういう人の所には仏さまの方からおいでになって一緒に住んでくださるというのです。信仰者にとってこれほど嬉しい、有り難いことはありません。 仏さまと共に住み、仏さまと共に起き、仏さまと共に眠りにつく…。 誠に信仰生活の極致の法悦境(ほえつきや)というべきでありましょう。

(P352・7行/P265・2行)



## <随喜功德品のあらすじ>

【『仏の無量寿(久遠実成)』を確信し、歡喜して得られる功德について、  
彌勒菩薩が問う】——

【二九六頁一行】『仏の寿命』は永遠であり、『仏の本体』の不生不滅を信受することで得る功德と、そのことを信受する者がいる所に、仏さまの方から出向いて来られ、一緒に住んでくださるということを行った彌勒菩薩は、世尊にお伺い申し上げました。

【(偈)二九六頁 四行】「世尊よ。信仰深い男女がこの『法華經』の教えを聞いて、心から有り難いという『随喜の心』を起こしたならば、どれほどの功德があるのでしょうか」

(彌勒菩薩は、すでにこのことは解っているのですが、まだこのことをよく理解していない者や、信仰の初歩的段階の人たちのためになり替わって、お伺いをしたのでした)

【『仏の無量寿(久遠実成)』を確信し、歡喜して得られる功德について】——  
『五十展転(ごじゅうてんでん)』の功德——

【二九六頁六行】世尊は彌勒菩薩にお答えになりました。

「阿逸多(あいつた・彌勒菩薩の別称)よ。如来の滅後に出家・在家の男女の修行者、または信者ではないが物事の分別ある者、さらには老若男女問わずどのような者であっても、この教えを聞いて、『ありがたい』という随喜の心を起こし、その心をもって様々な場所に出向いたとしましょう。そこが僧房であっても、寂しい所や、にぎやかな街、村、田舎、田畑の里などいずれの所であってもかまいません。そこでその者が、父母や親戚、善き友人、知り合いの人々に対して、／  
『其(そ)の所聞(しょもん)の如く～力に隨(したが)って演説せん』 聞いた教えの通りに自分ができ  
ることを自分の能力に合わせてで説いたとしましょう」

【二九六頁 終行】『是(こ)の諸人等(しよにんら)聞き已(おわ)って隨喜して復行(またゆ)いて轉教(てんぎょう)せん』「その後、その教えを聞いた人たちもまた、『ありがたい』という随喜の心を覚えて、その教えを様々な所で伝えたとしましょう。さらにそれを聞いた人たちがまた、『ありがたい』という気持ちを起こして様々な所で、同じように教えを伝えたとしましょう。『展轉(てんでん)して第五十に至らん』 こうして教えが転々と展開して、それが50回も繰り返されたとしましょう」

「阿逸多よ。その50回目に当たる善男子・善女人が、教えを聞いた人が、『ありがたい』と随喜の心を起こしたとするならば、その功德というものは大変大きいものがあります。その功德についてこれから説くことにします。ですからよく聞くのです」

【二九七頁 三行】「もし、四百万億阿僧祇(あそうぎ)という計り知れない数の世界。すなわち宇宙全体に存在する人間界に住む全ての者、また、六道(人間界・天上界・畜生界・餓鬼界・修羅界・地獄界)にいる者、鳥類・爬虫類・両生類・魚類・哺乳類・昆虫・微生物など全生物が、一つとして残らず幸せになるようにと、その一つひとつが欲しているものをすべて与えたとしましょう。それはたとえば、一人ひとりの人間に地球上を覆(おお)うほどの七宝(しっぽう)、つまり金・銀・瑠璃(るり・青紫色の宝石)・磲磔(しゃく・貝の一種、またはサンゴ)・碼瑙(めう・エメラルド)・真珠・玫瑰(まいえ・赤色の宝石)や、そうした七宝で飾られた象・馬・車・宮殿・樓閣(ろうかく)を与えたとします」

【二九七頁 終五行】「そのような布施を80年間も続けてから、その人は次のように考えました。『私は衆生が欲する通り、生活が楽になり、楽しくなるようにと、全てのものを与えて来た。しかし、この衆生はみな80歳を超える高齢者になり、体は衰え、髪は白くなり、顔は皺(しわ)だらけなり、死期も近づいている。今こそ、仏法をもって教え導くことが大切だ』と」

【二九七頁 終行】「そのように考えた大施主(だいせしゅ)は人々を集めました。そして人を導く順序次第である《示教利喜・じきょうき》の順序にそって教化しました。その順序次第とは、『教えのあらましを示し《示》て、その次に『教えの深い意味を丁寧(ていねい)に説き《教》』。さらに『教えを實踐して利益(りやく)が出るように導き《利》』、最後にその人が『教えを保つことに喜びを覚え、生きがいを感じる《喜》』ことができるように導くのでした」

【二九七頁 終行】「そして人々はその教えを聞いて喜び、教えを實踐することで須陀洹道(しゅたおんどう/仏道の中に溶かかっている状態)・斯陀含道(したこんどう/迷い(まよ)いほとんどなくなった状態)・阿那含道(あなこんどう/凡(たゞ)たの状態には再び戻ることのない状態)・阿羅漢道(あらかんどう/声聞(しやうもん)の最高の境地、一切の迷いから解脱した状態)というすべての迷いや煩悩から離れた四つの深い禅定の境地を一瞬に得ることができたとしましょう。そなたはどう思いますか？ その大施主(だいせしゅ)が得る功德というものは、多いと思いますか。それとも少ないと思いますか」

【(偈)三〇一頁 四行】「また、人々に向かって次のように説いたとしましょう。／(『世は皆牢固(みならうこ)ならざること 水沫(すいまつ)・泡(ほう)・焰(えん)の如し 汝等(なんだち) 咸(ことごと)く應當(まさ)に疾(と)く厭離(おんり)の心を生ずべし』)『この世は無常です。決して変わることはない固定した存在などありません。すべては水に浮かぶ泡のようであり、または揺(ゆ)らいでは一瞬として止まることのない炎(えん)のようなものです。だからこそ、移ろいゆく物事や存在にとらわれる心を、すぐに捨て去らなければならないのです』と説き聞かせたとしましょう。この者が得る功德というものは、大きいものだと思いますか？ 少ないと思いますか」

【二九八頁 三行】 仏さまの問いに弥勒菩薩は、すぐお答え申し上げました。

「世尊よ。この人の受ける功德は甚大(じんたい)で、誠に計り知れませんが、この大施主は衆生の一切の生活を支え、布施を尽くしたばかりか、一切の迷いを取り除くという境地にまでも導いたのでですから、その功德は極めて大きいものだと申せます」

【二九八頁 五行】すると世尊は弥勒菩薩に、一段と語調を強めて仰せになりました。

／(『我今(われいま) 分明(ふんみょう)に汝に語る』)「では、ここでははっきりと申しておきましょう。この者は、四百万億阿僧祇(あそうぎ)という無数の数の世界、つまり全宇宙に存在する人々の一切の生活を支えてきました。そればかりか、すべての迷いから解き放たせ、声聞(しやうもん)の最高の境地である阿羅漢果(あらかんが)という境地にまでも導いてきました。しかしその功德というものは、先に述べた50番目の者が法華經のたった一偈(いちげ)でも聞いて随喜したことによって得る功德に比べれば、はるかに小さく、とても及ぶものではありません。／(『百分・千分・百千萬億分に其(そ)の一にも及ばじ。乃至(ないし) 算數(さんじゆ)・譬論(ひゆ)も知る事能(あた)わざる所なり』) 百分の一、千分の一、いや百千万億分の一にも及びません。数の上では全く計算できず比較に

なりません」

【二九八頁 終三行】「阿逸多(あいつた)よ。 / 『第五十人の展転(てんでん)して法華經を聞いて隨喜(ずいき)せん功德、尚お無量無邊阿僧祇(あそうぎ)なり』 法華經が展転(てんでん)して説き継(つ)がれて50人目の人が隨喜して得る功德というものは、無量無邊阿僧祇(あそうぎ)という無限の大功德です。

【三〇一頁 終五行】『何(いか)に況(いわ)んや法會(ほうえ)に於て初(はじめ)に聞いて隨喜(ずいき)せん者をや』ましてや、最初の法會(ほうえ)で初めて法華經を聞いて隨喜した人の得る功德というものは、誠に無量無邊であって、他と比較することができない甚大(じんだい)なものです。」

## — 【五十展転(ごじゅうてんでん)】

### 【須臾聞法(しゆもんぽう)の功德について】—

【二九九頁 一行】「また阿逸多(あいつた)よ。ある人がこの法華經を聞くために僧房に赴(おもむ)き、座つてでもよい、立っていてもよい。 / 『須臾(しゆ)も聽受(ちようじゆ)せん。是(こ)の功德に縁(よ)って〜』 ほんのひと時でも『法華經』の説法を聞いたならば、その功德によってその人は、大變素晴らしい所に生まれ変わることができるでありましょう。そして最高の乗り物に乗って、天上界の宮殿へと昇って行くことができるでありましょう」

【二九九頁 三行】「もしある人が、法華經が説かれる法會(ほうえ)に着座している時、あとから入って来た人に『さあ、ここにお座りになって法華經をお聞きなさい』と、自分の席を半分譲って誘(いさな)ったとします。この人の得る功德は、次の世では帝釈天(たいしゃくてん)や梵天王(ぼんてんの)がいる天界の諸天善神のそばにいることができるばかりか、この娑婆世界では、轉輪聖王(てんりんじやうおう)／仏法に従ってこの世を正しく平和に治める最高(たか)の大王と並んで座ることになるでしょう」

【二九九頁 六行】「阿逸多よ。ある人が他の人に向かって『法華經が説かれているので、一緒に聞きに行きませんか』と誘(いさな)ったとしましょう。そしてその誘(いさな)われた人がその通りに付いて行き、ひと時のあいだ教(お)えを聞いたならば、その誘(いさな)った人が受ける功德は、すべての悪をとどめ、あらゆる善を押し進める菩薩である陀羅尼(だらに)菩薩と同じ所に生まれかわり、極めて機根が高く、最高の智慧を具える人となるでありましょう。 / 『百千萬世に終(つい)に瘡癩(かさ)ならず、口の氣(いき)臭(くさ)からず』 その人は、百千万回生まれ変わっても、口がきけなくなることはなく、また口の息が臭(くさ)くなることもありません。【(偈)三〇二頁 三行】『優鉢華(うぼつげ)の香(か)常に其(そ)の口より出(い)でん』そして青蓮華(しょうれんげ)のような爽(さわ)やかな香りが、いつも口から放たれるでありましょう。そして口にも舌にも病を持つことはありません。これは肉体的なことを示しているだけではありません。人に誤解を与えずに自分の意思を正しく他に伝えることができ、相手に不快な思いをさせないということを示します。歯が黒くなり、また黄色にならず、歯の間が空(す)けることなく、欠け落ちることなく、不規則に生えることなく、曲がることもありません。また、唇が垂れ下がることがなく、引きつり縮(ちぢ)むことなく、粗(あら)く醜(みにく)くなることなく、唇に出来物ができることなく、一部が欠損することなく、ゆがむことなく、厚くもなく、大きすぎることもなく、黒ずむこともなく、人から忌(い)み嫌われるような悪相になることはありません。これも肉体的なことを示しているのではなく、その人の発言や言葉遣い、そして主張することが周囲に嫌悪感(けんおかん)や不快感を与えるような

人にはならないということを示します」

【E00頁 一行】「また、鼻は平らでなく、曲がっていることはありません。顔色は黒くなく、顔かたちは長く細く狭くなく、ゆがんでいるなど思わしくない人相にはなりません。したがって、唇も、舌も、歯も、みんな美しい姿であり、鼻は長く、額は広く平らで、すべての立派な人相を具えるでありますよう」

【E00頁 五行】「そればかりではありません。 / 『世世に生まれん所には佛を見たとまつり法を聞いて教誨(きょうげ)を信受せん』 その人は何度生まれ変わっても、必ず仏に会うことができ、法華経を聞くことができ、心から信受するでありますよう

【E00頁 六行】「阿逸多よ。しばらくの間、心を鎮(しず)めて、この真実について思いを巡らせてごらん下さい。 たった一人に法華経の聴聞(ちようもん)を勸(すす)める功德とは、これほど甚大(じんだい)なのです。 【E02頁 終二行】 『何(いか)に況(いわ)んや一心に聴(き)き其の義趣(ぎしゆ)を解説(げせつ)し説(せつ)の如く修行せんをや其(そ)の福限(ふくかぎ)るべからず』 ましてや自らが一心に教えを聞き、読誦し、さらには多くの人々が理解できるように教えを説き、そして、その教えを聞いた人たちがその教えの通りに実践したならば、その功德は、まさに無限であります」

#### — 【須臾聞法の功德・しゆもんぼうのくどく】

このように世尊は、法華経を聞いて『心から感激する素直な心』。そして教えを人に与えずにはおれないという『純真な気持ち』の大切さを説かれたのでした。



(P355・1行/P267・1行)

この品(ほん)には、〈初随喜・しゆいき〉の功德をさらに強調し、くわしく説いてあります。～『ああ、ありがたい』という感激の心が起こらなければ、いかに万巻(まんかん)の経典を読み、あらゆる教理をそらんじていても、それは仏教学に通じているだけであって、仏さまを信じているとはいいかねます。随喜の念があつてこそ、信仰といえるのです。

**しんこう か ざん**  
**信仰は掛け算** (P356・1行/P267・終4行)

信仰は、よく掛け算にたとえられます。すなわち「**信仰の対象×信仰の心=信仰の結果**」です。～信仰の対象が尊く完全なもの(100)であっても、それを信じ行じない人(0)の数式は、**100×0=0**となります。また、信仰心がどんなに燃え盛っていても、肝心の信仰の対象が空しいもの(0)であつたら、その数式は**0×100=0**となります。ましてや間違つた教えを信仰すれば(-1)、その数式は**-1×100=-100**となります。間違つた信仰をするのが、いかに恐ろしいことであるかが解ると思います。

ところが法華経という無限の教えを信仰すると、仮にそれを100という数字であらわすと、ほんの一念でも「ああ、ありがたい」と深く心に信ずれば、その一念を仮に(1)であらわすと、その数式は**100×1=100**という大きな結果になるのです。

初随喜というのはこれほど大切なもので、まして信仰心が、2、3、5、10…となるにつれて、その結果は次第に増大して、無限に広がっていくわけです。

## 《<sup>しゆい</sup>息<sup>ゆい</sup>惟のひととき ①》

「ああ、ありがたい」と感激の心 ～ (そいう)随喜の念があつてこそ、信仰といえるのです」と庭野開祖は説きます。

— ①私はこれまで『ああ、ありがたい!』という「随喜と感謝」を覚えたことがあったでしょうか? そして、②上記に記されている「信仰は掛け算」の指導を、あなたはどのように受け止めますか? かみ締めてみましょう。

ごじゅうてんでん  
**五十展転** (P365・1行/P274・終2行)

(五十人目に至ると感銘、感動は)最初の人より少しずつ薄れてきてはいるでしょうが、その薄れてきている感銘にすら、大きな功德が宿っているというのです。『五十展転』には、こういう深い意味があることを知らなければなりません。

『<sup>だいごじゅうにん</sup>第五十人の<sup>てんでん</sup>展転して<sup>ほけきょう</sup>法華經を<sup>き</sup>聞いて<sup>ずいき</sup>随喜せん<sup>くどく</sup>功德、<sup>な</sup>尚お<sup>むりょうむへんあそうぎ</sup>無量無邊阿僧祇なり』

(二九八頁 終三行)

## て手<sup>みちび</sup>どり・導<sup>たいせつ</sup>きの大切さ

「手どり」こそ重要な行法で、一生懸命に相手を手どり、それによってその相手が「人を導く」人材に育っていくことが大切です。もし「導き」をして、その後「手どり」をすればという順序だけなら、「導く」とその分「手どり」をする対象者が増え、結果的に「導く」こと自体が負担となってしまいます。大切なことは「導きの後に手どりがある」のではなく、「手どりの先に導きがある」。この捉え方が大切です。手どられた人が次の人を導いて行く。これこそが「五十展転」の生きた姿であると申せます。

## 《<sup>しゆい</sup>息<sup>ゆい</sup>惟のひととき ②》

この「手どりの先に導きがある」。この捉え方が大切です」という庭野開祖の指導を— あなたはどのように受け止めますか? かみ締めてみましょう。

ほうえん <sup>とうと</sup>  
**法縁の尊さ** (P381・終行/P288・2行)

法縁というものがどんなに大切であるかを教えられているのです。我々は仏性を持っていることは間違いないのですが、縁あってその仏性が目を覚まさなければ、救いに達することはできません。ですから何よりもまず教えに触れることが「前提条件」であり、従って、教えに触れる「縁」というものは、じつに尊いものと言わなければなりません。

## 《<sup>しゆい</sup>息<sup>ゆい</sup>惟のひととき ③》

「教えに触れることが大切であり、教えに触れる『縁』というものは、じつに尊いものです」と庭野開祖は説きます。 — では、私の人生を顧(かえり)みて、このみ教えの『縁』を頂いたことの意味。有り難さについて振り返ってみましょう。

しゅゆもんぼう  
須臾聞法 (P383・終5行/P289・6行)

『若しは坐し若しは立ち須臾も聴受せん。～及び天宮に乗ぜん』(二九頁 一行)

ほんの短い間、ただ「教えを聞いた」というだけで、天上界に生まれるというのです。「法を聞く」ことが、その人の人生に大きな転機を与えることになるのです。

すなお じゆんしん こころ  
素直で純真な心こそ (P400・終3行/P304・終3行)

『更に人の來ることあらんに勧めて坐して聴かしめ、若しは座を分って坐せしめん  
～共に往いて聴くべしと』 (二九九頁 四行)

教えを聞いて心から感激を覚える「素直な心」、また、「感激」を覚えたら、それを人に分け与えずにはおられなくなるという「純真な気持ち」…、これが信仰者にとって、最も大切であることを、この品で強く教えられているわけでありませう。

#### 《愚惟のひととき ④》

この「教えを聞いて心から感激を覚える『素直な心』、『純真な気持ち]… これが信仰者にとって最も大切である」と庭野開祖は説きます。

— あなたはこの『素直な心』、『純真な気持ち]を、どれほど具えていると感じますか？  
振り返ってみましょう。

#### ◇ ＜法師功德品のあらすじ＞

【『仏の無量寿(久遠実成)』を確信し、そのことを実践して得られる功德】—

【(三〇三頁一行) その時、仏さまは常精進菩薩に向かっお告げになりました。

「もし善男子・善女人が、法華經を受持し、読誦し、人に説き、書写したならば、すなわち『五種法師の行』を行じたならば、その人が六根(意識を含む体全体)に得る功德は計り知れませぬ。それは眼については八百の功德、耳については千二百の功德、鼻については八百の功德、舌(口)については千二百の功德、身については八百の功德、意(心・ころ)については千二百の功德を得ることができます。これによって六根すべてが清浄になります」

【『眼』の功德について】—

【(偈)三〇三頁 終行) 「この善男子・善女人は、すべてを透徹(とつてつ)して見抜くことができる尊い『眼』を持つことができます。そして、『五種法師の行』を行じ、さらに多くの人々に対して菩薩の『無所畏』(むしゆい)という法を説く姿勢(つまり、『総持不忘/そじふも— 聞いた教えを全て忘れず記憶して、



誰に対しても法を説くことができる』、『尽知法薬/じんちほうやく— 人々の機根と欲望を知っているために、どんな人に対しても適切に教えを説くことができ、その方法を知り尽くしている』、『善能問答/ぜんのわんどう— どんな質問に対しても真理に従って回答できる』、『能断物疑/のだんもつぎ— あらゆる疑問に対して、大慈悲心に基づいて仏の真意を言い切って説くことができる』という畏（おそ）れ憚（はば）ることのない姿勢で法華経を説くことができるようになります。その『眼』の功德をこれから説きますので、しっかりとお聞きなさい」

【三〇三頁 五行】「この善男子・善女人は、父母から与えられた生まれながらの肉眼が、清らかな眼となり、すべてのものを『ありのまま』に見ることができるようになります。そして、全宇宙を意味する三千大千世界の全ての山・林・河・海を見渡すことができるようになります。つまり、弥楼山（みるせん）・須弥山（しゆみせん）・鉄围山（てつゐせん）など、はるか天空を超える高い山々を見渡し、下は地獄界から、上は最高の天上界に至るまでのあらゆる世界を見ることができま

す。そして、そこに住んでいる人々が起こす出来事の全てを見極めることができるようになります。／（『業の因縁・果報の生處（しょうじょ）悉（ことごと）く見（ことごと）く知らん』）出来事の本質を見抜き、すべての原因と結果を悉（ことごと）く見極めることができるのです。つまり『因縁果報』の『縁起の法』を知り、因果の次第をすべて知ることができるようになるのです。／（『未（いま）だ天眼（てんげん）を得ずと雖（いえど）も肉眼（にくげん）の力（か）く（の）如（ごと）くならん』）未だ『天眼（てんげん）』という能力を身に付けていなくても、父母から与えられた『肉眼』のそのまま、この能力を具えることができるのです」

### 【『耳の功德について』—

【三〇四頁 六行】常精進菩薩よ。もし善男子・善女人が、法華経を受持し、読誦し、人に説き、書写の行、つまり『五種法師の行』を行じたならば、その人は千二百の耳（聴覚）の功德を得るであります。それは汚（け）れの無い澄み切った清浄の耳で全宇宙である三千大千世界の全ての世界、つまり、下は地獄界から上は天上界に至るまでのあらゆる音や声を聞き分けることができるようになります。すなわち、あらゆる会話や言葉の意味、象・馬・牛・鳥などの鳴き声の意味、また車の音からわかるその状態、泣き叫ぶ声や嘆き悲しむ声から発する心の意味、ほら貝・太鼓・鐘・鈴・笛・琴の音（ね）や美しい歌声に込められる感情、笑い声・語り声・男性と女性の話し声・男の子・女の子の声など、全ての人々の様々な声の中にあるそれぞれの心情を聞き取ることができます。法を説く声・法から離れた話し声・苦しみと楽しみの声・凡夫と聖人の声・喜びの声・喜んでいない声・天人と竜・夜叉（やしや）や乾闥婆（けんたつば）や阿修羅をはじめとする様々な鬼神の声に込められている意味、火が燃える響き・水と風の音から、その状況の真意を聞き取ることができます。【（偈）三〇五頁 終二行】（『地獄の衆（もろもろ）の苦痛（くるしみ）種種（しじゆ）の楚毒（そどく）の聲（こゑ） 餓鬼（がき）の飢渴（けかつ）に逼（せ）められて 飲食（おんじき）を求索（ぐしゃく）する聲（こゑ）』）また、地獄界・畜生界・餓鬼界の中にいる者の苦しみの声、呵責（かしゃく・責め立てる）を受けてあげる悲鳴の意味。貪（むさぼ）る声や渴きに苦しむ声、そして、比丘・比丘尼・声聞・縁覚が修行している声の意味。菩薩や仏が法を説き、教えの意義を説く言葉の意味、これらを悉（ことごと）く理解し、あらゆるものの『ありのまま』を聞くことができるようになります」

【三〇五頁 二行】「つまり、全宇宙である三千大千世界のあらゆる場所で、あらゆるものの声や音の意味を聞き取ることができるようになります。『天耳通（てんにつ）』という神通力を具えなくても、

父母から与えられた生まれながらのそのままの耳で、そうした能力を具えることができるのであります。ですから様々な声を聞いても、すべてを聞き分けることができ、決して混乱することはありません」

### 【『鼻』の功德について】——

【三〇七頁 三行】「常精進菩薩よ。もし善男子・善女人が、法華經を受持し、読誦し、人に説き、書写という『五種法師の行』を行じたならば、その人は八百の鼻（鼻覺）の功德を得ることができます。それは清浄な嗅覺を持つことによって全宇宙である三千大千世界全ての香りをかぎ分けることができるようになるのです。たとえば、須曼那華香（しゅまなけこう）や闍提華香（しゃたいけこう）などの花からとった香料をはじめ、木の香り、葉の香り、果実の香り、青蓮華香（しょうれんげこう）や白蓮華香（びやくれんげこう）・栴檀香（せんたんこう）・沈水香（じんすいこう）という香料、そして千万種類の香料を混ぜ合わせて作った香料、香の粉末や体に塗る塗香（すこう）、／【(偈)三〇頁 終四行】（天上の諸華等（しよけとう）の曼陀曼殊沙（まんだまんじゅしゃ）波利質多樹（はりしつたじゅ）香（か）を聞（か）いで悉（ことごと）く能（よ）く知らん）」そして天界に咲く曼陀羅華（まんだらげ）や曼殊沙華（まんじゅしゃげ）、大木の波利質多樹（はりしつたじゅ）の香りなど、それらすべてを悉（ことごと）く嗅（か）ぎ分けることができるようになります」

【三〇七頁 終四行】／【(偈)三〇九頁 四行】／【(偈)三〇頁 終二行】「また、様々な人の匂い、もろもろの生き物の匂い、つまり、象・馬・牛・羊の匂い、男性・女性・少年・少女の匂い、草木や藪（やぶ）・林などの匂いなどをかぎ分けて、誤るといふことはありません。天人の香り、帝釈天が壮麗な御殿で美しいものを愛（め）でる時の香り、妙なる音楽を楽しんでいる時の香り、あるいは妙法堂にいる忉利天（とうりてん）の天人たちに説法している時の香り、様々な庭園を回遊されている時の香り、男女の天人の香りなどを、はるか遠くから嗅ぎ知ることができます。そして徐々に天界に登り、さらに梵天から昇（のぼ）って光音天（こうおんてん）、徧淨天（へんじょうてん）、そして最高の有頂天（うちょうてん）に至るまでの様々な天人の香り、天界で焚（た）かれる香の香り、禪定に入っている人や禪定を終えた人などの香りなどを嗅ぎ知ることができるのです。そればかりではありません。大王や王子・家来などがどこにいるのか、その所在を知ることができます。／【(偈)三〇九頁 五行】（『及び地中（じちゅう）の寶藏（ほうぞう）～香（か）を聞（か）いで所在を知らん』）。【(偈)三〇頁 六行】（『地中（じちゅう）の衆（もろもろ）の伏藏（ぶくぞう）金（こん）・銀（ごん）諸（もろもろ）の珍寶（ちんぼう）～悉（ことごと）く能（よ）く知らん』）また地中にある貴重な資源や宝物、そして金銀や銅器に盛られた宝などの埋藏物がどこに埋まっているか、その場所を知ることができます」

【(偈)三〇九頁 終二行】「天空を貫く鉄圍山（てっせん）という高い山や大海の深い海底のどこに生物がいるのか、その所在を知ることができます。また男女の阿修羅やその家来たちが戦っている様子を匂いをもって知ることができます。荒野や奥深い谷間に様々な動物がどこにいるのかもわかります。そればかりではありません。／（『若（も）し懷妊（えいに）せる者あつて未（いま）だその男女（なんによ）無根（むこん）及び非人（ひにん）を弁（わきま）えざらん』）妊娠している人の胎児が男の子であるのか女の子であるのか、その性別、そして立派に生まれるか否かがわかります。／（『安樂にして福子（ふくし）産まんことを知らん』）また初めての妊娠で、果たして無事に子を産むことができるのか、または流産・死産なのか、つまり安産で立派な子を産めるのかを知ることでも

きます。／『男女(なんによ)の所念(しょねん) 染欲癡恚(ぜんよくちい)の心を知り 亦(また)善を修する者を知らん』さらには男女が抱(いだ)く煩惱や欲望、愚痴の心や怒りの心、そして善行を行おうとしている人が誰なのかを知ることができるのです」

【三〇八頁 終四行】『亦皆遙(またみなはる)かに聞(か)いで其(そ)の所在を知らん』「声聞・縁覺・菩薩、そして諸仏の香りをはるか遠くから嗅ぎとり、何処におられるのかその所在が分かります。また、／【(偈)三一頁 終四行】『存在方(ざいざいほう)の世尊の一切に恭敬(くぎょう)せられて衆(しゅ)を愍(あわれ)んで説法したもう』様々な世界にいる仏が一切の衆生から恭敬(くぎょう)され、慈悲の説法をされている場所を知ることができます。／【三〇八頁 終三行】『然(しか)も鼻根(びこん)に於て壞(やぶ)らず錯(あやま)らじ。若(も)し分別して他人の爲に説かんと欲せば憶念(おくねん)し謬(あやま)らじ』そして、その香り一つひとつ嗅ぎ分けて、決して混乱することなどありません。またそれらの香りの違いを他人に伝えるとき、その香りをしっかりと記憶して間違うこともありません。以上のように、法華經を受持する者は、菩薩の境地である全ての煩惱から完全に解脱し、鼻が眞理と一体となった『無漏法生(むろほっしょう)』の鼻になってはいなくても、生まれながらの鼻がこのような偉大な能力を持つことができるのです」

### 【『舌の功德』について】——

【三二頁 二行】「常精進菩薩よ。もし善男子・善女人が法華經を受持し、読誦し、人に説き、書写したならば、すなわち『五種法師の行』を行じたならば、その人は千二百の舌の功德を得ることができます。この功德には二つの意味があり、それは『食物の味が良くなる』ことと、『発する言葉が人の心を動かす』という意味の功德があります」

【三二頁 三行】『諸(もろもろ)の苦澀物(くしゅうもつ)、其(そ)の舌根(ぜつこん)に在(お)かば皆變(みなへん)じて上味(じょうみ)と成り、天の甘露(かんろ)の如くにして美(よ)からざる者なけん』【(偈)三一頁 七行】『終(つい)に惡味(あくみ)を受けじ其(そ)の食噉(じきだん)する所あるは悉(ことごと)く皆甘露(みなかんろ)とならん』「**第一**に、見かけの善し悪しにかかわらず、たとえまずい物であっても、**全て**が『甘露』のように美味しくなります」

【三二頁 五行】「**第二**に、その人が大衆に向けて法を説くならば、／【三二頁 六行】『深妙(じんみょう)の聲(こゑ)を出(いだ)して能(よ)く其(そ)の心に入れて皆歡喜(みなかんぎ)し快樂(けらく)せしめん』心に残る深い響きの声となって、聞く人の心に沁(し)み入り、深い感動と喜びを与えるようになります。そればかりか、その奥深い声による説法は、諸々の**天界の天子・天女**、帝釈天(たいしゃくてん)・梵天王(ぼんてんのう)などの**諸天善神**に対しても説かれ、その理路整然とした説法に、それらの諸天善神は悉(ことごと)く深く聞き入るのでありました。そして竜神や夜叉(やしや)、乾闥婆(けんたつば)などの**鬼神**たちも法を聞くために集まって来て、その人に恭敬(くぎょう)讃歎(さんたん)するでしょう。そればかりではありません。天人や鬼神たちは、／【(偈)三一頁 四行】『常に念じて守護し 或時(あるとき)は爲(ため)に身を現じたまわん』その説法者を常に守護し、場合によっては自らの姿を現わして守護するでしょう。また、**出家・在家の男女の修行者や国王・王子・家臣**たち、様々な諸国の王たち、最高の王である**轉輪聖王(てんりんじょうおう)**やその家来たちも、その法を聞くために集まって来ます。／【(偈)三一頁 終二行】『是(こ)の説法の人若(も)し妙音(みょうおん)を以て 三千界に徧滿(へんまん)せんと欲せば 意(こころ)に隨(したが)って即(すなわ)ち能(よ)く至ら

ん 大小の轉輪王(てんりんおう) 及び千子眷属(せんしけんぞく) 合掌し恭敬(くぎょう)の心をもって常(じょう)に來(きた)って法(ほふ)を聽受(ちようじゆ)せん』そしてその人が三千世界、つまり全宇宙にこの教えを行き渡らせようと望むならば、その望みの通りになるでしょう。その結果、三千世界のすべての世界の轉輪聖王(てんりんじょうおう)たちが、多くの家來を従え、教えを聞くために集まりました。そして恭敬(くぎょう)の心を捧げて合掌し、法(ほふ)をしっかりと聽聞(ちようもん)したのでした」

【三三頁 一行】『是(こ)の菩薩善(よ)く説法(せっぽう)するを以ての故(ゆえ)に、～其(そ)の形壽(ぎやうじゆ)を盡(つ)くすまで隨侍(ずいじ)し供養(くぎやう)せん』「この法(ほふ)を説く者はすでに『菩薩』であり、この『菩薩』は巧みに法(ほふ)を説きますので、社会の上流階級の人や有力者をはじめ人民のすべてが、その菩薩が亡くなるまでの一生涯、その身の回りのお世話をして供養(くぎやう)するようになります」

【三三頁 二行】「『又(また)諸(もろもろ)の聲聞(しょうもん)・辟支佛(びやくしぶつ)・菩薩・諸佛常に樂(ねが)って之(これ)を見たまわん～諸佛皆其(みな)その處(ところ)に向って法(ほふ)を説きたまわん』諸々の聲聞・緣覺・菩薩も、その人に会うことを願ひ、さらには諸仏もその人に会うことを常に願ひ、仏の方からお会いに来て下さいます。そしてその人は一切の仏法を受持していますので、仏はその人に対して教えの深い真義についてお説きくださるのです」

### 【『身』の功德について】——

【三四頁 五行】「常精進菩薩よ。もし善男子・善女人が法華經を受持し、読誦し、人に説き、書写すなわち『五種法師の行』を行じたならば、その人は八百の身の功德を得ることができます。その人は一点の曇りもない清らかな身となり、まるで全身が瑠璃(るり)のような宝石で覆(おお)われた美しい身となります。そして多くの人々がその人に会いたいと願うようになります。その身は清浄であるために全宇宙である三千大千世界のすべての生きとし生けるものの誕生や死の場面、また、それぞれの生き物の性質の善し悪し、姿の美醜(びしゆう)、そして生まれた所の環境の善悪などが悉(ことごと)くその身に映し出します。それはすべての『実相』をその身に反映するということを意味します。／『其(そ)の身淨(きよ)きが故(ゆえ)に、～悉(ことごと)く中に於て現(あら)せん』つまり身が清浄で『我』がないために、この世の全てのものの姿が歪(ゆが)むことなく、曇ることなく、『ありのまま』に映るということです。【(偈)三五頁 三行】『又淨明(またじようみやう)なる鏡(かがみ)に悉(ことごと)く諸(もろもろ)の色像(しきぞう)を見るが如く』まさに、鏡にすべての姿がありのままに映るように、その身に映(うつ)し出されるようになるのです」

【(偈)三五頁 四行】「この法を説く者はすでに『菩薩』であり、／『菩薩淨身(じやうしん)に於て～唯獨(ただひとり)自(みづか)ら明了(みょうりやう)にして余人(よにん)の見ざる所ならん』姿は清らかであるために、世の全ての姿が如実に『ありのまま』に映し出されます。ただしこれはその菩薩のみに見えるものであって、その他の人には見えるものではありません」

【三四頁 終四行】「その人は、天空を貫(つらぬ)く鉄圍山(てつゐせん)などの様々な高山にいる王や生き物たちの姿を、悉(ことごと)くその身に映し出します。下は阿鼻地獄(あびちごく)から上は有頂天(うちやうてん)に至るまでの全ての生きものの姿を映し出すのです。そして聲聞・緣覺・菩薩たちが説法している所や、諸仏が教えをお説きになる姿を／【三四頁 終行】『皆身中(みなしんちゆう)に於て其(そ)の色像(しきぞう)を現(あら)せん』その身に映し出すのであります」

【(偈)三五頁 五行】「一切の生物、天上界・人間界の人々、そして修羅界・地獄界・餓鬼界・畜生界

の『四悪趣・あしゅ』の世界にいる者、つまり『六道』にいる全ての者のありのままの姿を映し出します。さらに諸仏をはじめ声聞や菩薩が説法している姿も映し出されるのであります。それは全ての煩惱から完全に解脱し、体全体が真理そのものになった『無漏法生・むろぼっしょう』の境地の身でなくても、そのような優(すぐ)れた能力を身に付けることができるようになるのです」

### 【『意』の功德について】——

【三―五頁 終二行】「常精進菩薩よ。もし善男子・善女人が仏の滅後に於いて法華經を受持し、読誦し、人に説き、書写、すなわち『五種法師の行』を行じたならば、その人は千二百の心の功德を得ることができます。この人の心は大變清らかで清浄であるために、全てのことを明確に受け止め、洞察力(どさつよく)が研(とぎ)澄(す)まされています。／【(偈)三―六頁 終三行】『是(こ)の人は意清浄(こころしょうじょう)に明利(みょうり)にして穢濁(えじよく)なく～無量の義を通達(つうだつ)せん』心に汚(けが)れや濁(にご)りがないために、ものごとの真相を見極め、偏見というものがありませぬ。そのため、仏の方便の教えから真実の教えのすべてを悉(ことごと)く理解することができます。そのため、仏の様々な教えをほんの一偈を聞くだけで、そこに含まれている深い意味・真義を余すところなく理解することができます。したがって法華經の一偈一句を聞くだけで、そこに含まれている無量無辺の深い意義を全て理解することができるのです。そしてその意義を一ヶ月、四ヶ月、一年間説き続けても、／【三―六頁 三行】『諸(もろもろ)の所説(しよせつ)の法、其(そ)の義趣(ぎしゅ)に隨(したが)って、皆實相(みなじっそう)と相違背(あいはい)せじ』常に正しい意義から逸(そ)れることなく説き続けていくことができます。決して『諸法実相』の教えから逸脱するということはありません」

### 【行動することすべてが、法華經の通りに行動できる】——

【三―六頁 四行】『若(も)し俗間(ぞっけん)の經書(きょうしょ)・治世(じせ)の語言(ごごん)・資生(ししょう)の業等(ごうとう)を説かんも、皆(みな)正法に順ぜん』「もしその人が、『若し俗間(ぞっけん)の經書(きょうしょ)』(日常生活についての指導書、倫理や道德)、そして『治世(じせ)の語言(ごごん)』(政治・経済・法律など社会問題全般)、さらに『資生(ししょう)の業(ごう)』(農・工・商のすべての産業)などについて論じても、全ては自然と『正法』に合致していきます」

【三―六頁 五行】「この三千大千世界の全宇宙に存在する六道を輪廻(りんね)する衆生が、心の中でどのようなことを思い考えているのか。そのすべてを知ることができます。その人がまだ全ての煩惱から完全に解脱した仏の『智慧』というものを具えていなくても、心の奥が清浄であるために、以上のような尊い能力を発揮することができるのです」

【三―六頁 七行】「そしてその人が、あることについて発言すると、／『皆是(みなこ)れ佛法にして眞實ならざることなく、亦是(またこ)れ先佛(せんぶつ)の經の中の所説(しよせつ)ならん』それらは全て仏法に当てはまり、真実から逸(そ)れるということは一つとしてありません。過去の仏さまがお説きになられた内容にも、すべからく一致するのです」

### 【『身』の功德について・つづき】——

【(偈)三―七頁 二行】「この人は、十方無数(じっぽうむしゆ)の仏が衆生のために説く全ての教えを、悉

(ことごと)く聞いて受持します。／『説法すること亦(また)無量にして終始忘れ錯(あやま)らじ法華を持(たも)つを以ての故に』)そしてその教えを人に説く時、自由自在に説くことができ、本義を忘れたり、法を間違って説くことなどありません。すべてを正しく説くことができるのです。これも『法華經』を受持しているためであります。すべての『教えの本義』。そしてその本義を説く『順序』。その本義を説く『方法』。これらのことを知っているために、どんな人に対しても自由自在に法を説くことができるのです。しかもその説法の内容は、過去の諸仏と全てが一致しますので、／『衆(しゆ)に於て畏(おそ)る所なけん』) どのような人が来ようとも、決して畏(おそ)れはばかるということがありません」

【(偈)三一七頁 七行】『法華經を持(たも)つ者は意根(いこん)淨(きよ)きこと斯(か)くの若(ごと)くならん』

「このように『法華經』を受持する者は心が清浄であるために、以上のような尊いはたらきがで  
きるのです。そして、いまだ一切の煩惱を解脱していなくても、／『先(ま)ず是(か)くの如き相あらん』) 煩惱から解脱した相を具えることができるのです。ですから、このような素晴らしい境地に安定しているために／『歡喜(かんぎ)して愛敬(あいきやう)することを爲(え)ん』) あらゆる人々から愛され、慕われるようになります。／『能(よ)く千萬種(せんまんじゆ)の善巧(ぜんぎやう)の語言(ごごん)を以て分別して演説(えんぜつ)せん』) この人は、無数の正しい言葉を巧みに使いこなし、さまざまな相手の機根に応じて適切に法を説くことができ、そのために、誰もが心に染み入るようにその教えを聞き入れます。こうした説法ができるのも、／『法華經を持(たも)つが故(ゆえ)なり』) 偏(ひとへ)に『法華經』を受持しているからなのであります」



### ほっしくどくほん しゆし 法師功德品の趣旨 (P403・1行/P307・1行)

前の『隨喜功德品』は、初心者が得る功德について説かれていましたが、この品では、もう一歩進んだ段階の信仰者、すなわち「法師」の功德について説かれています。

そこで世尊は『常精進菩薩』に向かって説かれました。

### まなこ くどく 眼の功德 (P416・1行/P317・3行)

『功德ある殊勝の眼を得ん是を以て莊嚴するが故に其の目甚だ清淨ならん

～未だ天眼を得ずと雖も肉眼の力は是の如くならん』 (三〇四頁 一行)

その人は偉大なる能力を得て、優れた眼を得るでしょう。その能力によって全てのものをありのままに見ることができましょう。父母から与えられた眼でさえも、全てを見通す素晴らしい能力を具えるでしょう。

⇒ 心が澄み切って、「我」がいないために、『先入観や主観』によって物事の『真相』を歪(ゆが)めて見ることがないのです。

## 《<sup>しゆい</sup>思惟のひととき ⑤》

「眼の功德を得ることによって、『物事の真相』をみることができ、普通の人では見えない所が見えるようになる」と世尊はお説きになられています。

— この『物事の真相』を見る。『見えない所が、見える』というのは、具体的にどのようなことを言うのでしょうか？ 考えてみましょう。

### みみ くとく 耳の功德 (P424・8行/P324・3行)

信仰の進んだ人は、あらゆる人の声（苦しみ、悲しみ、怒り、喜び）すべてを(正しく)聞きとることができる…というのです。

『<sup>よう</sup>要を以て<sup>もつ</sup>之を<sup>これ</sup>言わば<sup>い</sup>三千大千世界の中<sup>さんぜんだいせんせかい</sup>の一切内外<sup>なか</sup>の所有<sup>いっさいないげ</sup>る 諸<sup>あらゆる</sup>の聲<sup>もろもろ</sup>、未だ<sup>こえ</sup>天耳<sup>いま</sup>を得ず<sup>てんに</sup>え

と雖<sup>いえど</sup>も、父母<sup>ぶも</sup>所生<sup>しよしよ</sup>の清淨<sup>しよじよ</sup>の常<sup>つね</sup>の耳<sup>みみ</sup>を以て<sup>もつ</sup>皆<sup>みな</sup>悉<sup>ことごと</sup>く<sup>き</sup>聞き<sup>し</sup>知らん』 (三〇五頁二行)

## 《<sup>しゆい</sup>思惟のひととき ⑥》

「耳の功德を得ることによって、普通の人では聞こえない声が、聞こえるようになる」と世尊はお説きになられています。 — この「聞こえない声が、聞こえる」というのは、具体的にどのようなことを言うのでしょうか？ 考えてみましょう。

### はな くとく 鼻の功德 (P435・2行/P334・終5行)

鼻というものは、人間の五官のうちで、もっとも「動物的」なものです。それだけに、人間の「生理や感情」に直接的に影響を及ぼすものです。

匂(におい)というものは、なかなかとらえがたいものですが、それすらも自由自在に嗅(か)ぎ分けるようになる…というのです。やはりものの本質がハッキリつかめるようになるという意味にほかなりません。そればかりではありません。その物事が「尊いか、尊くないか」「正しいか、正しくないか」「安全か、危険か」を嗅ぎ分ける・知り分けることができるのです。

『<sup>およ</sup>及び<sup>しようもん</sup>聲聞<sup>か</sup>の香<sup>びやくしぶつ</sup>・辟支佛<sup>か</sup>の香<sup>ぼさつ</sup>・菩薩<sup>か</sup>の香<sup>しよぶつ</sup>・諸佛<sup>み</sup>の身<sup>か</sup>の香<sup>またみなはる</sup>、亦<sup>か</sup>皆<sup>そ</sup>遙かに<sup>か</sup>聞いて<sup>そ</sup>其の

<sup>しよざい</sup>所在<sup>し</sup>を知らん』 (三〇八頁 八行)

『<sup>も</sup>若し<sup>えにん</sup>懐妊<sup>もの</sup>せる者<sup>いま</sup>あつて<sup>そ</sup>未だ<sup>なんによ</sup>其の<sup>むこんおよ</sup>男女<sup>ひにん</sup>無根<sup>わきま</sup>及び<sup>か</sup>非人<sup>か</sup>を<sup>ことごと</sup>辯<sup>え</sup>えざらん<sup>か</sup>香<sup>か</sup>を<sup>ことごと</sup>聞いて<sup>ことごと</sup>悉

く<sup>よ</sup>能<sup>し</sup>く<sup>し</sup>知らん』 (三〇〇頁 二行)

したくどく  
**舌の功德** (P457・終3行/P355・4行)

舌の功德は、二つに分かれていて、第一は食物の味がよくなること、第二は自分の説くことがよく人を動かすようになるということです。

『又 諸の聲聞・辟支佛・菩薩・諸佛常に樂って之を見たまわん〜諸佛皆其の

ところむかほうと  
處に向って法を説きたまわん』(三三頁 二行)

諸々の声聞・縁覺・菩薩、そして諸仏が、その人に会うことを常に願っている…。

仏さまのほうから、「会いたい」と欲せられるというのですから、どんなに価値ある人間であるかが解ります。

しんぢい  
**《患懼のひととき ⑦》**

『舌』の功德では、このように「仏さまの方から『会いたい』と言われる人になる」ということが説かれています。

— 「仏さまの方から『会いたい』というこの教えを、あなたはどのように受け止めますか？ かみ締めてみましょう。

みくどく  
**身の功德** (P469・終4行/P365・終5行)

『其の身淨きが故に、〜下阿鼻地獄に至り上有頂に至る所有及び衆生、悉く中

に於て現ぜん。若しは聲聞・辟支佛・菩薩・諸佛の説法する、皆身中に於て

そしきぞうげん  
其の色像を現ぜん』 (三一四頁 七行)

「五種法師」をよく行する者は、全てのものの実相をその身に反映するような、「清浄な人間」になるということです。つまり、その人には「我」というものがありませんから、この世のすべてのものの姿が、歪みもなく、曇りもなく、ありのままに映るというわけです。

(P472・1行/P367・終行)

こころくどく  
**意の功德** (P475・終2行/P371・4行)

『其の義趣に隨って、皆實相と相違背せじ』(三一六頁 三行)

『若し俗間の經書・治世の語言・資生の業等を説かんも、皆正法に順ぜん』

(三一六頁 四行)



げんじつせいかつ おし しょうぼう がっち  
現実生活の教えが正法に合致 (P479・6行/P374・6行)

ほんとうの意味において深い信仰に達している人は、こういう実生活上のことからについて説いても、それがおのずから仏さまの説かれた正法に一致してくるというのです。

～ 「我」が出ると、いきおい、ものの考え方が「目先のもの」だけになり、わがまま勝手になり「われ・ひと共に生かす」という大きな見方ができないことが多いのです。しかし、真の信仰に徹している人は、ものの考え方が「全てのものを生かす」という仏さまの見方になりますから、その説くところも、ひとりで「仏の教えと一致する」ようになるのです。

しか そ いこん しょうじょう かく ごと こ ひと しゆい ちゅうりょう  
『而も其の意根の清浄なること此の如くならん。是の人の思惟し籌量し

ごんせつ ところ みな こ ぶっぼう しんじつ また こ せんぶつ  
言説する所あらんは、皆是れ佛法にして眞實ならざることなく、亦是れ先佛の

きょう なか しょせつ  
經の中の所説ならん』 (三一六頁 六行)

こ ひと こころしょうじょう みょうり えじよく こ たえ いこん もつ じょうちゅうげ ほう  
『是の人は意清浄に明利にして穢濁なく此の妙なる意根を以て上中下の法

し ないしいちげ き むりょう ぎ つうだつ  
を知り乃至一偈を聞くに無量の義を通達せん』 (三一六頁 終三行)

むりょう ぎ しゆい せっぽう またむりょう しゅうしわす あやま  
『無量の義を思惟し説法すること亦無量にして終始忘れ錯らじ』(三一七頁 三行)

ほけきょう たも もの いこんきよ か ごと  
『法華經を持つ者は意根淨きこと斯くの若くならん』 (三一七頁 七行)

しゆい  
《思惟のひととき ⑧》

『仏の無量寿』(仏さまは久遠の存在で、常に私のそばにおられる)と『諸法実相』(すべては一つの存在である)を体解し、『五種法師』の行を實踐する者は、行動すること、話をすることすべてが「仏の如くに、真理の如くなる」と説かれています。

— では、この教えと比べて、日ごろの私の姿勢はどうであるか？  
振り返ってみましょう。

ほっしくどくほん しんい  
法師功德品の真意 (P489・7行/P383・6行)

第一は、

「法華經の教えを本当に心から行ずれば、心身ともにこのような高い境地に達し得るのだから、一心不乱に行きなさい」という励ましの意味です。

第二は、

「真の法華經行者は、仏法の神髓を説き弘める大切な役目を果たすために、このような『全ての真実を知る力』を具えている必要がある。したがって、そのような境地に達していない者は、まだ修行が足りないのである。常に『自分をかえりみ』、『増上慢(ぞうじょうまん)に陥(おちいる)ことなく』、『限りない修行を積みなさい』という戒めの意味です。

《思惟(しゆい)のふいかえり まとめ》

今日の『随喜功德品第十八』、『法師功德品第十九』の学びを通して、何を学び取ったか？  
(または、何を一番強く感じ、受け止めることができたか?) 振り返ってみましょう。

合 掌